

聖書: マタイの福音書2章13~23節

説教: 悲しみをともにされるイエス

はじめに

本年最後の礼拝となりました。一年を振り返ってみれば、民族と民族が、国と国とがますます激しく争っていき、そのことに人々が心を痛める年であったと思います。

先週は、東の国からイエスを捜して旅をしてきた博士たちのことを見てきました。彼らは不思議な星に導かれて幼子がいる家を見つけ、幼子イエスを礼拝し、贈り物を献げて帰って行った。そのような心温まるクリスマス・ストーリーでした。しかしイエス誕生にまつわる話はここで終わりません。悲惨な事件が起きていく。それが今日開いている箇所です。なぜこのようなことが起こったのか。そこに神さまのどのようなご計画があったのか。ともに考えてまいります。

1 ヘロデ王

1) 「王が生まれた」

博士たちがエルサレムにやって来て「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と叫んだ時、人々は「これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった」と書かれています。なぜ人々が動揺したか。将来イスラエル国家の王となる方、つまり皇太子が生まれたというのなら、こぞって喜ぶべきではないのか。それなのにどうして動揺するのか。おそらくこういうことでしょう。ヘロデ家に最近子どもが産まれたという話しは聞いていない。それなのに皇太子が生まれたということは、ヘロデ家ではない別の人間が王の位に就くということしか考えられません。ということは王位を巡って戦争が起きるかもしれない。それで人々が動揺した。もちろん一番動揺したのはヘロデです。このまま聞き逃すわけには行きません。すぐに博士たちを警察に連行して事情聴取する。聞いてみると、幼子が生まれた時期はかなり詳しく知っていたけれど、生まれた場所までは分からない。そこで今度は聖書の専門家を集め、諮問会議を開いた。そうしたらミカ書に「ユダを治める者がベツレヘムから出る」と書いてあるとの答えです。ヘロデ王はこの情報を博士たちに教え、場所がわかったら教えてくれ、自分もいつか拝むからと言いつつ含めた。刑事ドラマふう言えば、泳がせたということです。居場所が分かったら礼拝するのではなく、殺そうとい

う魂胆です。そんな恐ろしい計画があることを知らない博士たちはベツレヘムに向かい、幼子を見つけ礼拝しました。ヘロデ王との約束があるので、またエルサレムに引き返そうという晩、彼らは夢で初めてヘロデの計画を知らされ、居場所を知られないよう、わざと別の道を通って帰っていった。ああよかった。間一髪助かった。

2) 男の子を殺させた

と思ったら大変なことが起きた。博士たちが帰ってくるのを待っていたヘロデ、すぐに異変に気がつきます。警察に調べさせたら、博士たちを見失ってしまいましたとの報告。そこでヘロデはどうしたか。16節。「ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かったと激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。」

何の関係もない子どもを平気で殺させる、ヘロデはなんと冷酷で残酷だろう。こんなことをするなんて異常な性格者に違いない。あるいは二千年前の中東の人々は人権意識低く野蛮な人たちだったのだ。そんなふうに思ったかもしれません。

そういうことではない。いま世界で何が起きているか。つい最近までガザ地区で支援活動をしてきた「国境なき医師団」の会長が記者会見した記事がありました。この先生、いろいろな紛争地域で修羅場をかいぐつてきたベテランです。そのベテランの先生が、病院に運ばれてくる子どもたちが目の前でなすすべもなく死んでいくを見て、無力感に襲われ気持ちが整理できないで涙が止まらないというのです。ヘロデが特別なのではない。人間の罪がある限り、いつの時代でも同じことが繰り返されているのです。

2 母たちの嘆き

1) 慰めを拒んでいる

ヘロデがベツレヘムとその周辺の村に軍隊を送り、二歳以下の子どもを無理矢理母親の手から奪い、処刑していく。そんな目にあつた母親はどうなりますか。たまたまベツレヘム周辺で生まれた二歳以下の男の子だった、たったそれだけの理由でこうなる。他に理由はない。だれが納得しますか。「ラケルが泣いている。その子らのゆえに。」

慰めを拒んでいる。子らがもういないからだ。」これはエレミヤ書31章からの引用です。理不尽な理由で子どもを奪われて泣き叫ぶ母親を、だれがどのように慰めることができるでしょうか。どんなことばも母親を傷つけるだけ。慰めを拒むというのは、人間のもっとも悲しい状態を表すことばではないでしょうか。

2) なぜこのようなことが

皆さんこれをどう思われるでしょうか。「イエスが十字架のみわざという人類にとって大きな救いを成し遂げるためには、多少の犠牲もやむを得ない。この事件の張本人はヘロデだったのだから、恨むならヘロデを恨むべきである。」そんなふうにするのでしょうか。確かに悪いのはヘロデです。でもそれですっきりしますか。外野席にいる観客は納得するかもしれない。でも、子どもを失った母親はどうか。こんな説明で納得しますか。まったく納得しない。母親の気持ちを代弁すればこうなるでしょう。

「なぜうちの息子が殺されなければならないのか。イエスがここで生まれなければこんなことにはならなかった。なにがユダヤ人の王なのか。なにが私たちの救い主なのか。自分だけエジプトに逃げて助かる。ということはうちの息子は救い主でないから価値がない、死んでもかまわないということか。」そういう疑問が湧いてくる。それともこんなことを言うのは、神への冒瀆だということでしょうか。いいえ、私はもっともな疑問だと思います。

3 イエス

1) 神は何もできないのか

この事件についてイエスはどう思われたのでしょうか。まだ赤ちゃんだったからなにも分からなかった、ではありません。この方は神ですから全部分かっています。それでも人間的に言いなおせば、イエスが大きくなって後であのときこういうことが起きたという話は聞いたはずです。そうしたらどうなりますか。自分のために関係のない子どもたちが巻き添えになって殺されてしまった。それを知ってどう思われたか。「やむを得なかったのだ」と言ったか。そんなはずはない。ルカの福音書にこんな記事があります。一人息子を亡くしたやもめをご覧になったイエスは、深くあわれんで「泣かなくてよい」と優しく声をかけられ、死んだ息子をよみがえらせた。そういう話しです。息子

を亡くした母親の悲しみを、イエスはよくご存じであることがこれでよくわかる。

それほどわかってくださるのなら、なおさらです。イエスは神としてヘロデがこういうことをしないようにもっといろいろなことをすべきではなかったのか。ところがこんな悲惨なことが起きてしまった。神は失敗したのでしょうか。であればこれは不都合な真実ということになる。なのにどうしてわざわざ聖書に載せるのか。そこに何か深い意味があるからではないですか。

2) エジプトに逃れる

この事件の起こる直前、ヨセフは夢の中で「エジプトに逃げるように」との警告を受け、エジプトに脱出してきます。そのことについて15節でこのような説明があります。「これは、主が預言者を通して、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と語られたことが成就するためであった。」これは旧約聖書のホセア書11章1節からの引用です。ホセアは、イエス誕生から数えておよそ730年前に活躍していた預言者だと言われます。あの列王記の時代です。そのホセアが預言したとおりのことが起きた。つまりこの事件は、神のご計画としてずっと以前から定められていたということになる。

こうなるともっと謎が深まります。イエスがエジプトに逃れることがすでに定まっていたというのなら、子どもたちがヘロデに狙われることもすでにわかっていたということです。そんなふうになら分からなかったのであれば、子どもたちが殺されることのないように守ることはできたはず。ところが、守られたのはイエスだけで、他の子どもたちはそうではなかった。

3) 悲しみをともにされるイエス

やはりイエスだけは特別だということでしょうか。そんなはずはありません。何度も繰り返しますが、イエスがこの事件について「あれはしょうがなかったことだ」と割り切っていたと思いますか。むしろ逆です。自分のために死んでいった子どもたちのことをいつも心にとどめていたはずです。この方は生まれた時から悲しみを背負っておられたのです。自分が生まれてきたことによって、関係のない子どもたちが巻き添えになり犠牲になってしまいました。

これと似たようなことは、私たちにも起こります。たとえば複雑な家庭の事情があつて、正式に結婚していない両親の元に自分は生まれてきた。大人

になってから、自分が生まれたことでいろいろな人たちが悲しい思いをしたことを知らされた。もちろんそうなのは自分の責任ではない。けれども、「私は生まれ来るべきでなかった」と自分を責めながら生きていく。絶対に逃れることのできない、一生背負っていかなければならない苦しみです。実はイエスもそうだった。

では、イエスは無力なのでしょうか。そうではない。確かにラケル（母親たちは泣くとエレミヤは預言しました。けれどもそれには続きがある。エレミヤ書31章16、17節はこう書いてある。「主はこう言われる。

「あなたの泣く声、
あなたの目の涙を止めよ。
あなたの労苦には報いがあるからだ。
——主のことば——
彼らは敵の地から帰って来る。
あなたの将来には望みがある。
——主のことば——
あなたの子らは自分の土地に帰って来る。」

イエスの十字架とはなんですか。この十字架はだれのためにあるのですか。もちろん私たちのためにある。それだけではない。ヘロデの手で殺された子どもたちのためにもあるのではないですか。息子を突然に奪われ、深い悲しみにある母親たちのためにもあるのではないですか。あの子どもたち、母親たちを救うために、イエスは十字架でご自分のいのちを投げ出してくださったのではないですか。

今も戦争が続いています。今日もだれかが殺され、悲しいことですがあしたも続いていくでしょう。そんな現実を前にすると、神は無力にしか見えません。いや、そうではない。神はどこにおられるのでしょうか。私たちの罪によって引き起こされたこの戦争のど真ん中に立っておられるのではないですか。神はなぜ戦争を止めないのか。私たちがそんなことを言う前に、イエスはすでに十字架の赦しを示しておられます。ここに本当の和解と平和がある。ここに人々が立ち戻りなさい。主は呼びかけておられます。

この一年、この方とともに歩むことができた幸いを感謝し、また来る新しい年も変わらずにこの方の御跡をたどってまいりたいと願います。